『國民新報』1940年9月15日

[主張]　個人の新體制

　わがはくをりり、、、、、そのをめたをするためにをつてります。とは一が一一となつて、をることであり、とは一のが、々そのにいてさんになることであります。にいては、もももももも、は、におけるまでも、までののをてゝ、さんになることであります。

　さんとはにをつてにつばかりではありませぬ。にいては、あらゆるがであります。もも、さんのやうに、のににするをり、がはれたるやにし、がはれたるに、をげることであります。までは、につをいては、われわれはにのをするといふであつたが、これからは、われわれ、一のとじく、のにつのであります。もはやわれわれにはかのもされませぬ。ももりませぬ。々とからるにしなければなりませぬ。をへとされたなら『はい』、をしてはならないとされたら『はい』、こんなものはつてはけない、つてもけないとされたら『はい』、こんなはめろとされたら『はい』、かやうに、すべてを『はい、はい』でくのがであります。をもされぬのであります。

　しかしわれわれはこのをびとし、としなければなりませぬ。なれば、これは、わがのためであり、われわれののののためであるからであります。かゝるなくしては、がとしてみつゝあるのはしげられぬからであります。

　だからわれわれはきついによつてのをらねばなりませぬ。まづ一のからきしませう。六の『きろ』のサイレンにずきませう。七ののサイレンにはずをしませう。ののサイレンにずをしませう。そのをしてるすべてのにんでしませう。そしてののを一にし、はたに、そのをせられたへでしてきませう。ではそのきはわれわれのためではなく、のためなのであります。をするのはをけるためではなく、をけるためであります。一にしてへば、われわれはやなのであります。はもうからをします。これからのであります[。]さんのく、またはの一のくをしてくのであります。

　のわがまゝの、のためのから、の、のにるにはとがでありますが、しかし、やこれはにななものではなくして、いやでもでも、さうならざるをなくなるのであります。にさうなるのであります。このしてにやるものにはのびととしてのがあり、らざるものにはなとにがあるべきであります。